

原因理由の接続表現「により(て)」について —その文法化と文体とのかかわり—

楊 瓊

一 問題提起

古代語の原因理由を表す表現の一つには、「により(て)」という複合辞がある。その原因理由を表す用法の発生については、漢文訓読の影響によって生じたとする見方と、日本語内部において自然に成り立ったとする見方がある。

築島(1963)は、「ニヨリテ」は格助詞の如き働きを有するものとして、「依——」などの漢文の字の訓読に起因するものであると指摘している。つまり、「ニヨリテ」は漢文訓読の影響によって生じたものという見方である。

一方、山口(1993)は、宣命と万葉集における原因理由を表す「ニヨリテ」を取り上げ、「ニヨリテ」は、

御諸に つくや玉垣 つき余し 誰にかもよら(余良)む 神の宮人

(古事記・歌謡 93)

のように、動詞「よる」にある「頼る」の意から「……次第である」「……に左右される」という意をもつようになり、そこから原因理由を示す用法が生じたと推測している。つまり、「ニヨリテ」の原因理由を表す用法の成立は漢文訓読と関わらず、日本語内部において独自に成立したとみているのである。

また、Matsumoto(1997, 1998)は、認知言語学の観点から、後置詞の文法化における意味変化を観察し、イメージ・スキーマに変形が起こる例として、「によって」を挙げている。動詞「よる」が‘x draw near y’ (x → y)の意から‘x is attributed to y’ (y ← x)の意になり、‘x because of y’ (y → x)のような原因理由を表す用法が文法化したとしている。

さらに、陳(2005)は、Matsumoto の‘x is attributed to y’の意から、‘x because of y’のような原因理由を表す用法が文法化した」という見方

に対して、‘be attributed to’ という意味は、「訓読語の現れる箇所」以外に見られなかったため、そこから ‘x because of y’ の意味へ文法化した可能性は低く、それが後に借用された動詞の意味である可能性が高いと述べ^{〔注1〕}、ニヨッテの原因理由を表す用法の文法化過程として、次の二つの可能性を提案した。

(1) ニヨッテが動詞「ヨル」(筆者注:「好意を寄せる」意)の中止形とも<原因>を表す後置詞とも解釈可能な例があるため、前者から後者への過程を経たと考える可能性

(2) 同時代にすでに存在する<根拠>から拡張したと考える可能性^{〔注2〕}

以上のように、山口(1993)、Matsumoto(1997, 1998)、陳(2005)は、「によって」の原因理由を表す用法は日本語の中で独自に文法化したとする点では共通するものの、その見解には相違が存する。そこで本稿では、万葉集の用例に基づき、「により(て)」の文法化のプロセスを実証的に示すことを目的の一つとする。

また、「により(て)」の用法を通時的に見ると、上代では体言接続の例が中心であったが、中古以降では、用言接続の例が増加し、さらに文法化が進んでいった。吉田(2007a)(2007b)は、「ニヨッテ」の接続助詞的用法を取り上げ、中世文献、特に抄物と狂言において勢力を強めていったことを述べ、その源流は、変体漢文における「ニヨリテ」の使用例と活用語承接例が他文体より多く見られることから、変体漢文に求められると指摘している。しかし、平安時代の漢文訓読文では「ニヨリテ」を専用するが、和文では「により」と「によりて」の両方を用いている。変体漢文における「依」字は「ニヨリ」と「ニヨリテ」のどちらかと読むべきことに確証がないことを考えると、用法の発達を考える場合、和文により多く用いられる「により」も含め、考え直す必要がある。そこで、接続助詞的用法の「により(て)」の和文、漢文訓読文、変体漢文における使用状況を再調査し、各文体における用法の特徴を整理し、そして和漢混淆文における使用状況は文体論的どのように位置づけられるのかを検討することも目的の一つである。

本稿では、原因理由の接続表現として「により(て)」は早く上代の日本語の中に成立していたことをまず次節で確認する。その上で、各文体における

使用状況を確認し、中古・中世に定着していった接続助詞の用法の文体的性格を考えてみる。

二 「により(て)」の原因理由を表す意味の成立

本節では、万葉集の歌を例として、「により(て)」の原因理由を表す意味の成立のプロセスを追ってみる。万葉集において、動詞「よる」は69例見られる。これらの例は、「よる」の動作主と対象語、および文脈的な意味用法によって、以下の四種類に分けられる。

I 〈具体物〉がある〈場所〉に距離的に接近・移動する……26例

動詞「よる」は本来、「物や人がある場所に近づく、近寄る」のような〈距離的接近・移動〉を表す語である。この原義に最も近い例を下に示す。

- (1) 暇あらば 拾ひに行かむ 住吉の 岸に寄る(因)といふ 恋忘れ貝(7・1147)
- (2) 年魚市潟 潮干にけらし 知多の浦に 朝漕ぐ舟も 沖に寄る(依)見ゆ(7・1163)
- (3) み空行く 月読をとこ 夕去らず 目には見れども 寄る(因)よしもなし(7・1372)
- (4) 川上に 洗ふ若菜の 流れ来て 妹があたりの 瀬にこそ寄ら(因)め(11・2838)

上記四例が示したように、例(1)は貝が岸に近寄る例であり、例(2)は舟が沖に近づく例である。例(3)は、文面上では人が月に寄る例であるが、作者が月を擬人化し、手の届かない存在の相手に思いを寄せるたとえとも考えられる例である。例(4)は、文面上では若菜が妹(の所)に寄る例であるが、草に寄せて思いを喩える歌なので、作者が思いを妹に寄せる例と考えられる。例(3)と例(4)のように、「寄る」が擬人歌や譬喩歌に多く用いられることで、メタファーによって、感情など抽象的なものに用いられるようになり、IIの段階へ展開していくこととなったと考えられる。なお、形態の面から、Iの段階では、「により(て)」の形をとっている例は一例もない。

II 気持ちや心などの〈抽象物〉がある〈人〉に傾く、寄り添う……27例

前述したように、IIはIから抽象化された用法と考えられる。この段階では、「よる」は「気持ちや心のような抽象物が恋人や支配者に傾く、寄り添う」

という意で用いられる。

(5) 明日香川 瀬々の玉藻の うちなびく 心は妹に 寄り(因)にけるかも(13・3267)

(6) 下つ瀬に 小網さし渡す 山川も 依り(依)て仕ふる 神の御代かも(1・38)

(7) 武蔵野の 草はもろむき かもかくも 君がまにまに 我は寄り(余利)にしを(14・3377)

(8) 秋の田の 穂向きの寄れる 片寄りに 君に寄り(因)な言 痛くありとも(2・114)

例(5)は「玉藻のうちなびく」のように、作者が心を妹に寄せる例である。例(6)は、対象がさらに特殊化され、「山川(神)が天皇に寄る」となる場合であり、「身を寄せて帰順する、服従する」の意に解釈できる。陳(2005)では、例(7)および前述した「誰にかもよら(余良)む」(記・歌謡 93)を、「心理的に頼る・従う」と解釈しているが、「草はもろむき」に対して、「我は君にひたすら心を寄せた」という意であり、例(7)には心理的な距離の接近や方向性が含意されていると理解したほうが妥当ではないか。例(8)は「君に寄りな言 痛くありとも」の句は、「秋の田の 穂向きの寄れる 片寄りに」と呼応して、「君に寄り添いたい、噂がひどくても」という意である。例(8)のような「君＋よる＋言痛く」の組み合わせは、「よる」が人物に接する点、「言の繁き」や「言繁く」のような表現が続く点で、Ⅲの例(9)や(10)と、類似している。

形態の面に目を向けると、Ⅱの段階では、動詞の用法であるが、「により」の形が7例見られ、それらの上接語はいずれも君(4例)と妹(3例)のような人物を表す名詞である。

Ⅲ ある事態の発生はこの〈人〉に起因する……12例

Ⅲに属する例は、〈もとづく、起因する〉の意で、「(対象物である人)のために・ためなら」と解釈されることが多い。

(9) 君により(因) 言の繁きを 故郷の 明日香の川に みそぎしに行く(4・626)

(10) 年きはる 世までと定め 頼みたる 君により(依)ては 言繁くとも(11・2398)

(11) 我が思へる 妹により(縁)ては 言の忌みも なくありこそと(13・3284)

(12) 我が命は 惜しくもあらず さにつらふ 君により(依)てそ 長く欲りせし

上記四例は、「君のために」「君のためなら」と解釈できる。しかし、これらの例において、「よる」の上接語は、いずれも「君」「妹」のような人を表す名詞に限られている。前述したように、これらの例はⅡの例(8)にみる表現に近い面があり、気持ちや心などの〈抽象物〉がある〈人〉に傾く、その結果、ある事態の発生はこの〈人〉に起因するという意と解釈でき、連続性も窺える。つまり、この段階では、「よる」は動詞としてⅡの「心を寄せる、寄り添う」のような意味から十分に離れておらず、ⅢはⅡと延長線上に捉えられるものと考えられる。

一方、形態上、「により」(2例)、「によりては」(8例)、「によりてそ」(2例)の形をとっており、助詞「ては」「てそ」が後接する例はあるが、「に＋より」の形態的な結合が確認できる。また、後続表現が「言の繁き」や「長く欲りせし」のように、多様になってくることで、ある事態の発生が前件に〈もとづく、起因する〉の意と解釈されやすくなると考えられる。

Ⅳ ある〈抽象物・事柄〉が原因で、ある事態が引き起こされた……4例

Ⅳはある〈抽象物・事柄〉が原因で、ある事態が引き起こされた用法である。この段階では、「よる」は〈原因〉にしか解釈できないと思われる。

(13) 石上 布留の尊は たわやめの 惑ひに因りて(尔縁而) 馬じもの 縄取り
付け(6・1019)

(14) 初花の 散るべきものを 人言の 繁きによりて(尔因而) 淀むころかも
(4・630)

(15) ねもころに 思ふ我妹を 人言の 繁きによりて(尔因而) 淀むころかも
(12・3109)

(16) 人言の 繁きによりて(尔余里弓) まを薦の 同じ枕は 我はまかじやも
(14・3464)

上記の4例は、いずれも「によりて」の形をとっている。「によりて」の対象物がⅢからさらに抽象化され、人を表す名詞以外に、例(13)の「たわやめの惑ひ」や例(14)(15)(16)の「人言の繁き」のような抽象名詞・事柄に接することができるようになっている。例(13)は「たわやめの迷いのせいで、馬のように縄を取り付け」という意であり、例(14)(15)は、「人の噂がひどいゆ

えに、通うのをためらっている」という意であり、例(16)は「人の噂がひどいからとて、薦で作った同じ枕を、わたしたちはせずにいようか」という意である。用例の示したように、この段階に至って、「によりて」は「せいで」「ために」「から」の意にしか解釈できず、〈原因〉を表す用法が成立していると考えられる。

以上のように、ⅠとⅡの段階では、「よる」が〈(具体物が場所に)距離的接近・移動〉と、そこから抽象化された〈(心や気持ちが人に)寄せる、寄り添う〉の意に用いられており、述語の位置に立ち、文や節の必須要素となっている。Ⅲの段階に至ると、Ⅱの意味と繋がっているが、「名詞＋により」の形で、後続表現の述語にかかって、〈もとづく、起因する〉の意となっている。ただし、上接語は人物を表す名詞に限られている。Ⅳになると、「よる」の上接語が広がり、抽象物や事柄を表すものに接し、「名詞句/動詞句＋によりて」の形で文の従属節となり、原因理由を表す意に解釈できるようになる。このように、「により(て)」は万葉集において原因理由を表す意味としてすでに成立していたと考えられる。

三 文体別から見た「により(て)」の接続助詞的用法

前節では、「により(て)」の原因理由を表す意味が上代に、すでに成立していたことを確認してきた。上代では、「により(て)」には体言接続、特に人物に接する例が中心であり、用言接続の用例の表現は「人言の繁き」のみとなっているが、中古になると、後述するように、用言接続の例が多く見られ、用言(助動詞も含む)の種類も多様になっており、さらに文法化が深まったと考えられる。本節では、「により(て)」の用言接続の例を中心に、和文、漢文訓読文、変体漢文におけるその上接語に着目し、各文体における使用状況の特徴を考察する。以下の調査では、用言接続の全用例数に占める比率を見るために、体言接続の例を附すが、その用法については言及しない。また、接続詞「これによりて」と慣用表現「なに(ごと)によりて」に含まれる例は除外する。

三・一 中古和文

前述したように、吉田(2007)では、接続助詞「によって」の起源は「によ

りて」のみになるとし、「により」を考察対象としなかった。しかし、中古和文では、「により」と「によりて」両方が用いられる。築島(1963)は、「テ」が付く「ニヨリテ」は、訓読語に頻用される形でありながら、和文にも見出せるものであるとする。一方、「テ」が付かない「により」は、訓読文には用いられず、和文では概して重々しい発言の際に用いているように認められるとしている。つまり、「により」と「によりて」は、形によって文体的な対立を持つが、和文では両方が用いられる。ここでは、「により」と「によりて」を総合的に捉えて、用法と使用傾向の面から、和文における定着を見ていく。

【表 1-1】は、用例を体言接続と用言接続に分け、さらに用言接続の用例を、形態上「により」と「によりて」に分け、本文の種別を会話文と地の文に分け、それぞれの用例数、および体言接続と用言接続の例の合計例数に占める比率を示したものである。

【表 1-1】和文における「により(て)」の分布

	体言接続	用言接続				小計	計
		「により」		「によりて」			
		会話文	地の文	会話文	地の文		
竹取	-	-	-	3	-	3(100.0%)	3
伊勢	-	-	-	-	1	1(100.0%)	1
土佐	2(100.0%)	-	-	-	-	-	2
大和	2(100.0%)	-	-	-	-	-	2
平中	1(100.0%)	-	-	-	-	-	1
蛸蛤	4(100.0%)	-	-	-	-	-	4
落窪	5(100.0%)	-	-	-	-	-	5
枕草子	1(50.0%)	-	-	1	-	1(50.0%)	2
和泉式部	1(100.0%)	-	-	-	-	-	1
源氏	39(52.0%)	19	11	3	3	36(48.0%)	75
紫式部	1(100.0%)	-	-	-	-	-	1
堤中納言	-	-	-	-	-	-	-
更級	1(100.0%)	-	-	-	-	-	1
大鏡	11(52.4%)	6	-	4	-	10(47.6%)	21
讃岐	1(50.0%)	-	-	1	-	1(50.0%)	2
古今集	3(100.0%)	-	-	-	-	-	3
物語和歌	7(100.0%)	-	-	-	-	-	7
計	79(60.3%)	25	11	12	4	52(39.7%)	131

【表 1-1】に示したように、「により」と「によりて」は時代による偏りはないが、作品による偏りは認められる。源氏と大鏡にそれぞれ合計 75 例、21 例あり、比較的によく見られるが、その他の作品では、用例数が稀である。源氏と大鏡に限って言えば、用言接続の比率が 5 割近く占めており、また、和文全体では、用言接続の比率も 4 割近く占める。万葉集の用言接続の 18.8% (=3/16) よりは、高くなっている。また、「により」と「によりて」の用言接続の例はいずれも会話文を中心に用いられる。「によりて」の合計 16 例に比して、「により」が合計 36 例であり、二倍以上の例数で多く見られる。したがって、和文において、「により」の例を数え加えると、用言接続の用例も少なくないことがわかる。

続いて、文法化の度合いを図るために、「により(て)」の上接語の品詞や助動詞別に区別ついて傾向を見る。その調査結果は【表 1-2】のようである。

【表 1-2】和文における用言接続の「により(て)」の上接語

		竹取	伊勢	枕草子	源氏	大鏡	讃岐	計
動詞連体形(敬語動詞)		-	-	-	6(1)	4(2)	1(1)	11
形容詞連体形		-	-	-	9	2	-	11
形容動詞連体形		-	-	-	-	-	-	-
助動詞の連体形	過去 シ	-	-	1	2	-	-	3
	ケル	2	-	-	-	-	-	2
	ツル	-	-	-	-	-	-	-
	完了 ヌル	-	-	-	1	-	-	1
	タル	-	-	-	-	-	-	-
	ル	-	1	-	-	1	-	2
	推量 ム	-	-	-	2	-	-	2
	ベキ	-	-	-	4	-	-	4
	断定 ナル	-	-	-	-	-	-	-
	タル	-	-	-	-	-	-	-
	打消 ヌ	1	-	-	2	-	-	3
	ザル	-	-	-	-	-	-	-
	打消推量 マジキ	-	-	-	1	1	-	2
	受身・尊敬 ルル・ラルル	-	-	-	-	-	-	-
	使役 シムル	-	-	-	-	-	-	-
存在表現アル(ハベル)・ナキ		-	-	-	5(2)	1	-	6
接尾辞ニクキ・ガタキ		-	-	-	1	1	-	2
連体詞サル		-	-	-	3	-	-	3
計		3	1	1	36	10	1	52

【表 1-2】に示したように、中古和文において、「により(て)」が訓読特有的な打消助動詞ザル・断定助動詞ナル・タルに接する例がないものの、動詞・形容詞連体形、過去・完了・推量・打消の助動詞、存在表現、接尾辞、連体詞など、様々な表現形式に接続しており、表現上のバラエティがある。この点から、上代の「により(て)」の表現から広がり、文法化の度合いの高さを反映していると考えられる。

このように、用言接続の比率と上接語の種類から、「により(て)」の接続助詞的な用法は相当に発達していたものと考えられる。しかし、吉田(2007a)(2007b)によれば、「ニヨッテ」の接続助詞化は中世以降となる。それは、中世以前の例は、「によりて」の前接語が活用語といっても、万葉集の「人言の繁き(コト)」のように、準体句として解釈できるからである。吉田(2007a)によれば、「によりて」の前接句が用言句となったことの根拠として、「ニヨリテ」の受ける句に現れる主題を表す係り助詞「ハ」に着目し、「AハBニヨッテC。」の構文は「ハ」の作用域の範囲によって、文末までに及んでいると解釈できるもの「Aハ[Bニヨッテ]C。」と、「ハ」の作用域が「ニヨッテ」節中に収まっているとしか解釈できないもの「[AハB]ニヨッテC。」とに分け、前者のBは活用語であるが、用法として体言相当の準体句を形成しているのに対して、後者のBは述語としての性格が強いため、用言句と解せるとしている。しかし、吉田氏の考察基準に当てはまる、用言句と解せる例は、大鏡にも見出せる。

(17) 左大臣は御年も若く、才もことのほかに劣りたまへるにより、右大臣の御おぼえことのほかにおはしましたるに、(大鏡・天 左大臣時平)

この例では、前件の主題「左大臣は」の作用域は後件句に及ばず、後件の主題が変わって、「右大臣の御おぼえ」になっている。

実際に、このような例は早く上代の続日本紀宣命において見出すこともできる。

(18) 墨縄は久しく辺成を歴て仕へ奉れる労在るに縁りてなも、斬刑をば免し賜ひて……(第六十二詔)

この例では、前件句の主題「墨縄は」の作用域は後件句にまで及ばず、後件句の主語は隠れている「朕」と考えられる。上記二例の場合、前件句は後

件句に対して従属性が弱く、そこに含まれる述語「劣りたまへる」「(劣)ある」は、独立性の高い例と見なせ、用言句と解せると考えられる。これによって、「により(て)」の接続助詞的用法は、古く成立していた可能性もある。

もともと「は」が従属節の中では現れにくいことと、日本語では主題や主題マーカ―を明示しない場合が少なくない実情から、吉田(2007a)の基準に満たす用例が見出せると言っても、中世までには数例程度にとどまる。しかし本稿では、「により(て)」の文法化を見据えた観点からは、様々な品詞や表現に接する以上、それを接続助詞的用法として積極的に捉えたい。

つぎに、用例が最も多い源氏に見られる例を通して、「により(て)」の出現傾向を捉えてみる。

- (19)「仏天の告げあるによりて奏しはべるなり。」(源氏・薄雲) →僧都の会話文
- (20)「重しとなるべき心おきてをならひなば、はべらずなりなむ後もうしろやすかるべきによりなむ。」(源氏・少女) →源氏の会話文
- (21)『月ごろ風病重きにたへかねて、極熱の草葉を服して、いと臭きによりなむえ対面賜らぬ。目のあたりならずとも、さるべからむ雑事らはうけたまはらむ。』(源氏・帚木) →博士の娘の会話文
- (22)年返りぬ。桐壺の御方近づきたまひぬるにより、正月朔日より御修法不断にせさせたまふ。(源氏・若菜上) →重々しい儀式感、記録的書き方

例(19)(20)(21)は会話文に見られる例である。源氏に見られる総計 22 例の会話文の話者は、僧都 5、源氏 5、桐壺院 2、頭中将 1、良清 1、左大臣 1、入道 1、鬚黒大将 1、朱雀院 1、致仕の大臣 1、柏木 1、夕霧 1、博士の娘 1 であり、博士の娘 1 例のほか、すべて男性である。僧都、源氏、博士の娘などの言葉は、従来、漢文訓読語や記録語の存在が指摘されている^[注3]ように、例(21)においても、前後に「極熱」「対面」「目のあたりならずとも」のような漢語や漢文訓読的表現が使われている。例(22)は地の文の例であり、儀式を描く場面で、記録的な書き方がされている。上の例からは、「により(て)」が男性の会話文や堅苦しい場面に用いられやすいことが確認できる。また、大鏡においても同じく、用例はすべて男性の会話文に見られることから、「により(て)」は和文の一般的な用語ではないことを示していると同時に、当時

の日常会話語の様子を反映していると考えられる。ただし、次の例(23)(24)のような普通の地の文に用いられる例もある。

(23)頼みきこえて年ごろになりぬる人を、今はともて離れむと思はぬにより
こそ、かくいみじとももの思ひ乱るれ、(源氏・浮舟)

(24)明けはてなばはしたなかるべきにより、急ぎ出でたまひぬ。(源氏・須磨)

このような例は源氏(10例)に集中している。これは「により(て)」を日常用語として使っている可能性も示しているが、紫式部の文体は漢文訓読文の影響を受けていることも考えられる。

以上、「により(て)」の和文における使用は、用法の面では、接続助詞的用法としての発達が認められるが、出現傾向から言えば、原因理由を強調的に言う男性の会話文や特定の場面や普通の地の文に共通して現れている。また、漢文訓読系の原因理由の接続表現「活用語+(が)ゆゑ」が本稿で取り上げた作品には10例のみ見出せることに比して、「により(て)」は、その5倍以上の数を持つことから、和文にはより馴染みやすい表現と言える。ただし、「により(て)」は論理的な原因理由を明示する表現として、文学志向の和文にはやはり疎遠な面があると考えられる。

三・二 漢文訓読文

本節では、平安初期から中世にまでの訓点資料における「ニヨリテ」の用例を見ていく。漢文訓読文では、「ニヨリテ」が用言接続をとる場合、「由」「因」「為」にあてられることが多い。表【2-1】は、漢文訓読文における「ニヨリテ」を体言接続と用言接続に分けて整理したものである。

漢文訓読文において、「ニヨリテ」合計369例のうち、体言接続が288例、用言接続が81例となり、用言接続の比率は約2割にとどまる。「ニヨリテ」がより多く頻用される資料金光明、地藏十輪經、三蔵法師伝では、用言接続の比率はそれぞれ24.3%、19.8%、15.0%であり、いずれも低い。

【表 2-1】漢文訓読文における「ニヨリテ」の分布

	体言接続	用言接続	計
0830 金光明	87(75.7%)	28(24.3%)	115
0850 表啓	5(100.0%)	-	5
0883 地藏十輪經	105(80.2%)	26(19.8%)	131
1016 南海寄帰	9(56.3%)	7(43.8%)	16
1058 妙法蓮華經	2(28.6%)	5(71.4%)	7
1080 三蔵法師伝	68(85.0%)	12(15%)	80
1113 白氏文集	2(100.0%)	-	2
1200 論語	2(100.0%)	-	2
1211 史記	1(100.0%)	-	1
1250 莊子	2(66.7%)	1(33.3%)	3
1344 遊仙窟	5(71.4%)	2(28.6%)	7
計	288(78.0%)	81(22.0%)	369

【表 2-2】漢文訓読文における用言接続の「ニヨリテ」の上接語

	0830 金	0883 地	1016 南	1058 妙	1080 三	1250 莊	1344 遊	計
動詞連体形(敬語動詞)	18(3)	17	3	1	7	-	-	46
形容詞連体形	-	-	-	-	3	-	1	4
形容動詞連体形	-	-	-	-	-	-	-	-
助動詞の連体形	過去 シ	2	-	-	3	-	-	5
	ケル	-	-	-	-	-	-	-
	完了 ツル	-	1	-	-	-	-	1
		-	1	-	-	-	-	1
		1	1	1	-	-	-	3
		1	-	-	1	2	-	4
	推量 ム	2	-	-	-	-	-	2
		-	-	-	-	-	-	-
	断定 ナル	-	-	-	-	-	-	-
		1	-	1	-	-	-	2
	打消 ヌ	1	1	-	-	-	-	2
		-	-	2	-	1	1	4
	打消推量 マジキ	-	-	-	-	-	-	-
	受身・尊敬 ルル・ラルル	-	3	-	-	-	-	3
	使役 シムル	2	-	-	-	-	-	2
存在表現アル(ハベル)・ナキ	-	2	-	-	-	-	-	2
接尾辞ニクキ・ガタキ	-	-	-	-	-	-	-	-
連体詞サル	-	-	-	-	-	-	-	-
計	28	26	7	5	12	1	2	81

【表 2-2】は漢文訓読文における用言接続の「ニヨリテ」の上接語を整理したものである。これによると、漢文訓読文における用言接続の「ニヨリテ」の上接語は、一見して和文におけるそれとあまり差がなく、幅広く分布しているが、それらの中で、敬語動詞の連体形、完了助動詞ツル・ヌル、推量助動詞ム、打消助動詞ヌ、受身助動詞ルル・ラルル、使役助動詞シムルの出現は、平安初期訓点資料の金光明と地藏十輪經に限られており、一般的な用法ではないと考えられる。つまり、一般的な漢文訓読文における「ニヨリテ」は、動詞・形容詞の連体形のほかは、過去シ、完了タル・ル、断定タル、打消ザルにしか接続しないことになる。とりわけ動詞連体形は、用例数の半分以上を占めるが、他の上接語の出現頻度は低い。

(25) 金鼓の勝妙なる音を聞クに由(リ)て、常に〔於〕諸佛に親近(し)たてまつること得シむ。(金光明・②34-20)

(26) 法師、足ヲ損セルニ因(リ)テ病ヲ得タリ。(三蔵法師伝・10/150)

(27) ^{マ(はと)}良に上-代行(せ)不るに由(里)て、後の人をして法を失は使(む)ることを致す。(南海寄帰・二 18/2)

漢文訓読文では、「ニヨリテ」が動詞として認識されるならば、上接用言の直後に「コト」を補って形式体言を作る必要が生まれてくるであろう。しかし、管見では、「ニヨリテ」と活用語連体形の間に、「コト」を挟む用例は一例も見られなかった。「ニヨリテ」が活用語連体形に直接続くことから、それは動詞ではなく、すでに一語に形式化した原因理由を表す接続助詞になった証拠と考えられる。一方、漢文訓読文では、用言接続の比率の低いことと、接続の種類が少ないことから、「ニヨリテ」の接続助詞的用法の発展に漢文訓読の影響があることはまず考えにくい。「ニヨリテ」の用言接続の用例が漢文訓読文に出現する理由は、漢文を直訳するときに、日常言語に定着しつつあった用法を背景として用いたからだと考えられる。

三・三 変体漢文

ここでは変体漢文における使用状況について述べる。変体漢文における原因理由を表す表現形式について、早く鈴木(1982)の研究があり、「ニヨリ(テ)」も取り上げられている。上代から平安後期にわたって、「ニヨリ(テ)」の用例の整理の結果は【表 3-1】になる。鈴木氏の調査によると、古事記と高山寺

古往来を除くと、いずれも体言接続が優勢であることがわかる。一方で、用言接続の用例が古事記にも見出せることから、接続助詞的用法が古い時代から成立していったことが窺える^{〔注4〕}。また、同氏の調査によると、「ユエニ」「アヒダ」「バ」のような原因理由を表す表現形式の中に「ニヨリ(テ)」の占める比率が、平安初期以前に 10～20%程であったのに対して、平安中期以降には 40～80%にまで増加していることから、変体漢文において、「ニヨリ(テ)」は平安中期から、勢力が強まっていったことがわかる。

【表 3-1】漢文訓読文における「ニヨリテ」の分布（鈴木(1982)の調査による）

上代						平安初期			平安中期				平安後期以降		
体言 接続 用言 接続	古事記	風土記	七代記	家伝	法王帝説	日本書異記	源論文稿	平安遺文（延暦～寛平）	平安遺文（延喜～康保）	貞信公記	九曆	将門記	御堂関白記	高山寺古往来 （長保まで）	小右記
体言 接続	11	37	2	9	3	25	3	220	149	261	392	21	692	6	249
用言 接続	19	12	0	0	?	9	3	2	19	104	98	10	233	15	87
計	30	49	2	9	6	34	6	222	168	365	490	31	925	21	336

つぎに、変体漢文で訓点が附せられたもの高山寺古往来、雲州往来、和泉往来を資料として、「ニヨリ(テ)」の上接語を調べてみる。その結果は【表 3-2】に示した。

【表 3-2】変体漢文における「ニヨリ(テ)」の上接語

		高山寺古往来	雲州往来	和泉往来	計
動詞連体形(敬語動詞)		2	2	-	4
形容詞連体形		1	1	-	2
形容動詞連体形		2	-	-	2
助動詞の連体形	過去	シ	-	-	-
		ケル	-	-	-
	完了	ツル	-	-	-
		ヌル	-	-	-
		タル	1	-	1
		ル	-	-	-
	推量	ム	-	-	-
		ベキ	-	-	-
	断定	ナル	1	-	1
		タル	-	-	-
	打消	ヌ	-	-	-
		ザル	1	-	1
	打消推量	マジキ	-	-	-
	受身・尊敬	ルル・ラルル	1	-	1
	使役	シムル	-	-	-
存在表現アル(ハベル)・ナキ		8	7	1	16
接尾辞ニクキ・ガタキ		-	-	-	-
連体詞サル		-	-	-	-
計		17	10	1	28

【表 3-2】に示したように、合計 28 例の中で、存在表現に接する例が 16 例あり、6 割近くを占めることが注目される。動詞連体形に接する例が 4 例、その他の上接語は 1 例、2 例程度で分布している。存在表現の比率の高さから、変体漢文における「ニヨリ(テ)」の使用はより偏りを持つと言える。

(28) 依無指事、久不申承、不審無極 (指事無^{サセルコト}(キ)ニ依^ニ(テ)久(シク)申承ラ不、不審、極(マリ)無(シ)) (高山寺本古往来 112)

(29) 慮外依有産穢、令申故障之处 (慮-外ニ産穢有^{サシニ}(ル)ニ依^ニ(リ)、故-障ヲ申(サ)令(ムル)〔之〕処ニ) (雲州往来 73 う 5)

(30) 依無慰懃、雖有所憚、不耐懇懷、執啓事由 (慰懃^{イシキ}无^ニキニ依^ニ(テ)、憚ル所有リト雖モ、懇懷ヲ耐^{ワサ}へ不レ、事(ノ)由ヲ執啓(ス)) (和泉往来 28)

存在表現の例について、御堂関白記と小右記における「依有」「依無」の用例数を『古記録フルテキストデータベース』で調べた結果、御堂関白記では「依有」「依無」それぞれ184例・57例、小右記では「依有」「依無」それぞれ245例・154例となり、高頻度で現れる。しかも、「依有」の出現頻度が「依無」を上回っている。「依有＋名詞/名詞句」は、「依＋名詞/名詞句」の意味とは変わらないと思われる。例えば、「依有方忌」（御堂8例、小右7例）と「依方忌」（御堂6例、小右2例）のように、両方見られるのである。このことから、「依有」は変体漢文において、名詞に続く場合と近く、つまり、名詞句と意識され、一種の類型的な表現形式になっていると推測される。

また、表記の面では、中古以降の変体漢文において、句末で用いられる「ニヨリ(テ)」は殆ど「依」で表記される。その他、「コレニヨリテ」は「因之・因茲」で表記し、接続詞の「ヨリテ」は「仍」で表記していることから、表記上、一定の原則が見られる。したがって、変体漢文において、漢字「依」と格助詞ないし接続助詞的な「ニヨリ(テ)」の結びつきが安定的と言える。

このような表記上の安定性は、表現上の類型化とあいまって、「ニヨリ(テ)」は実用的用語として記録体的な資料で多用されてきたのである。平安中期以降、変体漢文における用例の増加は用語の定着を推進させるが、その一方で、変体漢文における使用は、用法が限定される一面が強く見られ、「ニヨリ(テ)」の文法化に影響を与えたことは、漢文訓読文と同様に、さほど大きいとは考えにくいのである。峰岸(1986)が変体漢文を、貴族社会を中心として使用された日常口頭語の基盤の上に立つ男性知識層の書記言語であると位置づけているように、「ニヨリ(テ)」の接続助詞的用法は、変体漢文に起源するというよりも、むしろ男性中心の日常言語にすでに発達していた用法が、変体漢文において慣用的、形式的に用いられるようになったと考えられる。

四 院政鎌倉時代の和漢混淆文

三節では、用言接続の「ニヨリ(テ)」が和文、漢文訓読文、変体漢文におけるそれぞれの特徴について述べた。つぎに、和漢混淆文における使用状況を検討する。ここでは、今昔物語集、延慶本平家物語、方丈記、徒然草、十訓抄を資料として、用言接続の「ニヨリテ」を中心に見ていく。なお、今昔

は文体上、巻 20 を境に漢文訓読体と和文体に偏ることを考慮して、部ごとに示すことにする。

院政鎌倉期になると、「ニヨリ」の例は極僅かであり、用例は殆どテが付く形で現れる。【表 4-1】は、院政鎌倉期の和漢混淆文における「ニヨリテ」を体言接続と用言接続を分け、それぞれの用例数と比率をまとめたものである。

【表 4-1】院政鎌倉期における「ニヨリテ」の分布

	体言接続	用言接続	計
天竺震旦部	169 (52.8%)	151 (47.2%)	320
本朝仏法部	172 (47.9%)	187 (52.1%)	359
本朝世俗部	38 (57.6%)	28 (42.4%)	66
今昔全体	379 (50.9%)	366 (49.1%)	745
延慶本	109 (54.8%)	90 (45.2%)	199
方丈記	-	3 (100.0%)	3
十訓抄	36 (40.9%)	52 (59.1%)	88
徒然草	3 (60%)	2 (40.0%)	5
計	148 (50.2%)	147 (49.8%)	295

今昔の「ニ依テ」の用例は天竺震旦部と本朝仏法部に集中しており、本朝世俗部では一割ほど(66 例)にとどまる。山田(1935)、築島(1963)によると、動詞連用形にテを添えることが、訓読の世界に生まれたものであったとすれば、このような分布には文体上の性格が表れていると言える。また、用言接続の比率を見ると、天竺震旦部、本朝仏法部、本朝世俗部にそれぞれ 47.2%、52.1%、42.4%となり、本朝仏法部はやや高いが、ほぼ均等的に見られる。また、延慶本平家、十訓抄にも用例が多く見られ、用言接続の比率も 5 割前後で安定している。このように、院政鎌倉期における「ニヨリテ」は、形態上と用法上の定着が窺える。

【表 4-2】は院政鎌倉期資料における「ニヨリテ」の上接語をまとめたものである。今昔の用例数は巻 20 以前に偏っているが、三部ともに、上接語は、動詞連体形、存在表現、過去助動詞シ、完了助動詞ルなどに接続しやすい点では、共通性が認められる。また、鎌倉期の延慶本平家、十訓抄などでも、「ニヨリテ」は様々な上接語に接続しており、院政期の今昔の使用傾向とほ

ば同じである。和漢混淆文において、種々の上接語に接続できる面では、漢文訓読文と変体漢文というよりも、和文での使用状況と一致する。ただし、存在表現が今昔では、82 例と突出していることは、変体漢文の「依有」「依無」の影響が考えられる。この点は、本朝仏法部に存在表現に接続する用例が特に多いことから窺える。

【表 4-2】院政鎌倉期における「ニヨリテ」の上接語

		天竺震旦部	本朝仏法部	本朝世俗部	今昔全体	延慶本	方丈記	十訓抄	徒然草	計
動詞連体形(敬語動詞)		28 (5)	35 (6)	7	70 (11)	23 (1)	2 (1)	14 (4)	-	39
形容詞連体形		12	11	2	25	3	-	7	-	10
形容動詞連体形		2	3	-	5	3	-	-	-	3
助動詞の連体形	過去	シ	17	28	1	46	9	-	-	9
		ケル	1	5	3	9	13	-	6	20
	完了	ツル	3	1	-	4	-	-	-	-
		ヌル	1	1	-	2	2	-	-	2
		タル	12	7	-	19	2	-	4	6
		ル	33	25	-	58	1	1	6	9
	推量	ム	1	1	1	3	-	-	-	-
		ベキ	1	1	-	2	-	-	-	-
	断定	ナル	6	7	1	14	3	-	4	7
		タル	-	1	4	5	3	-	1	4
	打消	ヌ	-	-	-	3	-	1	-	4
		ザル	3	8	1	12	4	-	3	7
	打消推量	マジキ	-	-	-	-	-	-	-	-
	受身・尊敬	ルル・ラルル	-	-	-	5	-	-	-	5
	使役	シムル	-	-	-	2	-	-	-	2
	希望	マホシキ	-	-	-	1	-	-	-	1
存在表現アル(ハベル)・ナキ		27	47	8	82	8	-	6	-	14
接尾辞ニクキ・ガタキ		4	6	-	10	3	-	-	-	3
連体詞サル		-	-	-	-	-	-	-	-	-
疑問終助詞カ		-	-	-	-	2	-	-	-	2
計		151	187	28	366	90	3	52	2	147

(31) 其後、長谷雄、中納言マデ成上テ有ケルニ、大納言ノ闕有ルニ依テ、此ヲ望ムトテ、(今昔・巻 24 ノ 25)

(32) 是偏ニ仏神擁護ヲ加ヘテ、運命末ニ望メルニ依テ也。(延慶本平家・下 55⑩)

(33) 久しく篤疾にしづみ給へりけれども、群臣、あながちにすすめ申すによつて、位につき給ひにけり。(十訓抄・第一ノ 21)

以上、「ニヨリテ」の上接語の分布から、全体的傾向として、和漢混淆文での使用は、和文のそれと概ね一致することを述べた。これは、和漢混淆文における「ニヨリテ」の接続助詞的用法は和文の影響を受けたという結論を導くようにも見えるが、むしろこれは、和文と和漢混淆文の言語の土台に、日常言語的要素が存在していることを暗示すると考えられる。「ニヨリテ」の接続助詞的用法は日常用語(話し言葉)を背景に、和文では論理性のある会話と記述に用いられ、漢文訓読文では漢文の翻訳に当たって臨時的に採用され、実用性の変体漢文では形式化した用法で用いられることになったと考えられる。特に、十訓抄では、「によて」と「によつて」で表記される例が 14 例あり、体言接続は 2 例のみであるのに対し、用言接続は 12 例にも達する。小林(1973)では、「によりて」に比べて、「によつて」がより口語的であることを述べている。氏の指摘をふまえると、話し言葉の世界では「によつて」の形をとった用言接続用法が定着しつつあったことが推測できる。これが、中世の口語資料の抄物・狂言等で、「により(て)・によつて」の用言接続の比率が高まることにも繋がっている。

五 まとめ

以上、本稿においてまず、動詞「よる」から接続助詞的機能を担う複合辞「により(て)」への発展は、日常言語の中で自然に成立したものであることを述べた。「よる」が〈(具体物が場所に)距離的に接近・移動する〉と、そこから抽象化された〈(心や気持ちが人に)寄せる、寄り添う〉の意に用いられており、さらに、「名詞+により」の形になると、後続表現の述語にかかって、〈もとづく、起因する〉の意となっている。その後、「により(て)」の形で、原因理由を表す接続表現となった。ただし、上代では、上接語は人物を表す

名詞に限定される傾向が強い。中古(和文)になると、上接語の種類が多様化し、接続助詞の用法で働き、文法化が深まった。

そして、「により(て)」の接続助詞の用法は、日常言語を基盤に、和文、漢文訓読文、変体漢文、和漢混淆文に共通して用いられる原因理由の接続表現の一つと位置づけられるものとして捉えられる。万葉集の段階では、「により(て)」の文法化の度合いが未だ低く、論理的原因理由を伝達する表現として、実用性を求めている韻文では接続助詞の用法が現れにくいと考えられる。「により(て)」は実用的な用語として、和文においても男性の会話文や原因理由を強調的に言う必要がある部分に用例が現れやすいが、用法の面から、表現上のバラエティがあり、接続助詞的用法としての発達が認められる。一方、漢文訓読文では、元漢文の文脈に左右されるため、「ニヨリテ」の用言接続の比率が低くなり、「により(て)」の用法に影響した可能性は低い。変体漢文において、「ニヨリテ」は用例が多いものの、存在表現に接続する例が多い点では、用法上の偏りが見られる。この点は、和漢混淆文での使用傾向にも影響を及んだと考えられる。和漢混淆文における「ニヨリテ」の全体的傾向としては、和文のそれに近似するよう見えるが、実は日常言語を背景に用いられたと考えられる。

【調査資料】

用例検索・調査には、下記のデータベース・テキストを使用し、また、公開されている索引も使用している。

○和文・和歌

万葉集：『万葉集電子総索引（CD-ROM）』を利用し、本文は塙書房刊『万葉集』による。

土佐日記、竹取物語、伊勢物語、落窪物語、大和物語、枕草子、源氏物語、紫式部日記、和泉式部日記、平中物語、堤中納言物語、更級日記、讃岐典侍日記、蜻蛉日記、大鏡、古今和歌集：『日本語歴史コーパス（CHJ）平安時代編』を利用し、本文は小学館『新編日本古典文学全集』による。

○漢文訓読文（四桁の数字は加点年代を表し、築島裕編『訓点語彙集成』『和訓載録文献一覧』による。）

(0830)西大寺本金光明最勝王經十卷、平安初期点『西大寺本金光明最勝王經古點の國語學的研究』、(0883)東大寺本大乘大集地藏十輪經八卷、元慶七年点『古点本の國語學的研究』『東大寺諷誦文稿の國語學的研究』、(0850)知恩院藏大唐三藏玄奘法師表啓一卷、平安初期点『東大寺諷誦文稿の國語學的研究』、(1016)天理大學圖書館・国立京都博物館藏南海寄歸內法傳、長和五年頃点『訓点資料の研究』、(1058)龍光院藏妙法蓮華經七卷『訓点資料の研究』、(1080-1116)興福寺本大慈恩寺三藏法師傳、平安後期点(延久承暦頃朱点 1080・承德三年墨点 1099・永久四年墨点 1116)『興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古點の國語學的研究』、(1113)神田本白氏文集二卷、天永四年点『神田本白氏文集の研究』、(1200-1303)高山寺藏論語四卷、鎌倉時代点『高山寺古訓点資料第一』、(1211)高山寺藏史記二卷、鎌倉初期点『高山寺古訓点資料第一』、(1250)高山寺藏莊子七卷(甲卷・乙卷)、鎌倉中期点『高山寺古訓点資料第二』、(1344)醍醐寺藏本遊仙窟一卷、康永三年点『醍醐寺藏本遊仙窟總索引』

○変体漢文

古事記：『古事記音訓索引』を利用し、本文は『古事記新訂版』による。高山寺古往来『高山寺資料叢書二 高山寺本古往来表白集』、雲州往来『雲州往来享祿本 研究と総索引』、和泉往来『高野山西南院藏本和泉往来總索引』、また、御堂関白記と小右記の調査には、『古記録フルテキストデータベース』を利用する。

○和漢混淆文

今昔物語集：馬淵昌子[ほか]編『今昔物語集文節索引』を利用し、本文は日本古典文学大系『今昔物語集』による。延慶本平家物語：北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語 本文篇と索引篇』を利用する。方丈記・徒然草・十訓抄：『日本語歴史コーパス(CHJ) 平安時代編』を利用し、本文は小学館『新編日本古典文学全集』による。

○その他

続日本紀宣命：『続日本紀宣命 校本・総索引』を参照し、本文は新日本古典文学大系『続日本紀』による。

[注]

1. 筆者は、‘be attributed to’は「原因する」という動詞の意味であると理解している。この用法は万葉集にすでにあり、本稿での例(1)(2)のような用法であるとする。

2. 陳(2005)自身は(2)の時間的な前後関係を文献上確認できないと述べている。また、陳(2005)では、下の例の示したように、「によりて」の後続行為・状態の意図性の有無によって、非意図的な行為・状態を引き起こすものを〈原因〉とし、意図的な行為を引き起こすものを〈根拠(理由)〉としている。

〈原因〉君により(尔余里)我が名はすでに龍田山絶えたる恋の繁きころかも
(17・3931)

〈根拠〉人言の繁きによりて(尔余里互)まを薦の同じ枕は我はまかじやも
(14・3464)

しかし、3464番歌は、「人の噂がひどいからとて、薦で作った同じ枕を、わたしたちはせずにいようか」(『新編日本古典文学全集』)と解釈されているように、〈原因〉として読み取ることが一般的である。そのため、筆者は(2)のプロセスは成り立ちにくいと考える。

3. 築島(1963)による。

4. 下記の例の示したように、古事記では用言接続の例がしばしば見られる。

ト相而詔之、因女先言而不良。(ト相ひて、詔りたまひしく、「女先に言へるに因りて良からず。」)(古事記・上巻)

故、因此八嶋先所生、謂大八嶋国。(故、此の八島を先に生めるに因りて、大八島国と謂ふ。)(古事記・上巻)

古賀(1976)によれば、古事記において、「因」字を「……ニヨリテ」と訓むのが殆どである。

【参考文献】

古賀精一(1976)「古事記・日本書紀の用字―依・帰・因・由について―」『言語と文芸』83

小林千草(1973)「中世口語における原因・理由を表わす条件句」『国語学』94

鈴木 恵(1982)「原因・理由を表わす『間』の成立」『国語学』128

- 陳 君慧(2005)「文法化と借用—日本語における動詞の中止形を含む後置詞を例に—」『日本語の研究』1-3
- 築島 裕(1963)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会 pp. 61, 709, 817
- Matsumoto, Yo. 1997. From Attribution/Purpose to Cause: Image Schema and Grammaticalization of some Cause Markers in Japanese. Lexical and Syntactical Constructions and the Construction of Meaning, ed. by Marjolijn Verspoor, Keedong Lee & Eve Sweetser. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins., pp. 287-307.
- Matsumoto, Yo. 1998. Semantic change in the grammaticalization of verbs into postpositions in Japanese. ' In Toshio Ohori (ed.), Studies in Japanese Grammaticalization: Cognitive and Discourse Perspectives. Tokyo: Kurosio., pp. 25-60.
- 峰岸 明(1986)『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会 pp. 85
- 山口佳紀(1993)「続日本紀・宣命の文体と漢文訓読」『古代日本文体史論考』有精堂 pp. 162
- 山田孝雄(1935)『漢文の訓読によりて伝えられたる語法』宝文館
- 吉田永弘(2007a)「中世日本語の因果性接続助詞の消長—ニヨッテの接続助詞化を中心に—」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房 pp. 181-203
- 吉田永弘(2007b)「接続助詞ニヨッテの源流」『国学院雑誌』108(11)

(同志社大学大学院博士後期課程)